



▲美術館は一般の人でも利用できる施設。一年を通じ魅力的な企画をおこなっている

形学部と造形構想学部の2学部12学科へ変更したのだ。それに伴い、都心キャンパスである市ヶ谷キャンパスを同時に開設。アクセスがよく、新たにムサビの起点となるキャンパスが誕生したと言えるだろう。

学内には「教養を有する美術家」を育てる土壌が広がっている。その一つとも言えるのが、武蔵野美術大学美術館・図書館だ。一つの組織の中に美術館・博物



学生たちの憩いの場である「ゼロスペース」
photo by Nacása & Partners Inc

“教養を有する美術家” ムサビであることの意味

緑

豊かな閑静な住宅街で、多くの学校が点在する鷹の台。そこに建つのが、今回紹介する武蔵野美術大学（ムサビ）である。一般の人でも利用できる美術館があるため、訪れたことがある人も多いのではないだろうか。キャンパス内に一歩足を踏み入れると、制作に打ち込む学生たちの、充足した時間の流れを肌で感じることが出来るはずだ。

同学の歴史は古く、1929（昭和4）年10月30日に前身である帝国美術学校が創立。その後、造形美術学園、武蔵野美術学校と名前を変え、1961（昭和36）年に現在の鷹の台キャンパスを開設、翌年の1962（昭和37）年に武蔵野美術大学が設置された。

武蔵野美術大学の教育理念は「教養を有する美術家養成」。これは帝国美術学校の創立に寄与し、その経営と教育の中

心となった金原省吾の手記に記された言葉で、今でもその精神はムサビの根幹となるものだ。技術的専門性だけでなく、総合的な人間形成があつて初めて美術が成り立つという考えで、造形活動を通じて、真に人間の自由につながることを、美術・デザインを追求する目的だと言い換えることもできる。国内の美術大学では最大規模の造形教育の大学となった現在も、この教育理念を継承し、堅持しているという。

前身から起算し、2019年に創立90周年を迎えた同学は、学部を大きく改編した。造形学部のみを1学部11学科から、造



▲正門をくぐる学生たちの活気が伝わってくる

館・図書館の機能を併せ持つ知の複合施設で、「書籍だけでなく美術作品にも親しめるような美術大学ならではの図書館を作る」という発想からつくられた。美術館は、3万点にも及ぶポスターと400脚を超える近代椅子を中心に、4万点以上のデザイン資料や美術作品のコレクションを持ち、年間7〜8本の展覧会がおこなわれている。図書館は、約32万冊の図書と5000タイトルの雑誌を所蔵している。さらに約9万点にのぼる国内有数のコレクションを持つ民俗資料室や、約2万点の映像資料を視聴できるイメージライブラリーも併設し、学生たちの創作活動を後押しする存在となっている。また、図書館はその建築もユニークだ。建築家・藤本壮介の設計のもと、「書架の森」をコンセプトに、これまでの図書館の常識を180度転換した、ムサビらしいものとなった。外部からの利用はできないが、その外観を見るだけでも十分な価値がある。

学生の憩いの場である「ゼロスペース」

は、空間演出デザイン学科の五十嵐久枝教授が設計を担当。2019年度のグッドデザイン賞を受賞している。

さて、前述の市ヶ谷キャンパスだが、ムサビにとっては念願だった都心キャンパスだという。これまで大学の学外施設である「デザイン・ラウンジ」や「gallery



◀外観も本棚で埋め尽くされた図書館